

山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。
現役山大生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 「昨日も児童館の子どもたちがこの畑に来たんですよ」と楽しげに話す小笠原さん。にこやかに話しながらも手元はしっかり農作業。しその葉とエゴマの葉を手際よく摘んで、お土産にと持たせてくれた。

2 消費者交流芋植えということで、児童館の子どもたちがジャガイモの種芋植えを体験しているところ。小さな砂場用スコップで穴を掘って種芋を植え、ちいさな名札を立てていき、夏休みにはワイワイ芋掘りを楽しんだ。

3 ネギはチェーンポットに播き、1カ月半育苗して「引っ張り君」という機械で一気に定植。GW前に植えて、秋収穫。延々と何十枚も土を詰めて種をまき、土をかぶせて水をやり、育苗ハウスに並べていくのは結構大変。

農業にはさまざまな可能性があるかと確信。 自分なりの農業スタイルは譲れない。

小笠原史子 農業

私たちの健康の源はやはり食べ物。そんな思いから農業を志した史子さんは、農学部のある鶴岡市に初めて降り立った時、「空が広いな。ずっとここで暮らしたいな」と直感したという。その思いは変わることなく、卒業後も庄内に残り、1年間の農業研修期間を経て新規就農に踏み切った。女性一人での就農は難しいだろうと、周囲は誰もが農業法人への就職や農家のお嫁さんになることを勧めた。しかし、史子さんには理想とする農業スタイルがあり、それを実現するために自ら営農することを選んだ。研修先の農家から土地とハウスを借りて、枝豆やネギ、トマトなど数十種類もの野菜作りを一人でやってのけた。順風満帆とはいかないまでも、ずっと一人でやっていけるという

自信と手応えを感じ始めていた。そして、就農から5年、「一生独身でもいい。農家の嫁にはならない」そう考えていた史子さんに大きな転機が訪れた。農業後継者でありながら、史子さんを農家の嫁としてではなく、パートナーとして一緒にやっていきたいという男性が現れたのだ。三川町から海と山に囲まれた鶴岡市三瀬に移り住み、子どもにも恵まれた。パートナー家族の理解もあって、結婚後も史子さんはこれまで同様に自分の農業スタイルで野菜作りに励んでいる。育ち盛りの子どもたちにおいしい野菜をたくさん食べてほしいと児童館に野菜を提供したり、直売所での販売や個人販売にも力を入れている。収穫の喜びを実感してもらうために芋掘りなどの農業

体験も受け入れている。農業には、実にいろいろな可能性があってもおもしろいと語る史子さん。力仕事も多く、天候に左右される、確かに大変な仕事ではあるが、「本気でやって大変じゃない仕事なんてない」が持論の史子さんにとって農業の大変さは何も特別なものではないらしい。
大学時代は、大好きな山登りも存分にできたし、農業に関する知識を得る術を身につけることもできた。庄内には、同じ農学部の卒業生が少なくない。史子さんが野菜を提供しているユースホステルの若きオーナー夫妻も農学部出身。大学時代にお世話になった先生との交流も続いている。史子さんのまわりには、さまざまな山大ネットワークが息づいているようだ。

信念の成果